

令和元年6月13日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K00764

研究課題名(和文) 幼児期の絵本を介した親子の相互作用から捉える子どもの語りの発達の検討

研究課題名(英文) A developmental study of a child's narratives as seen from parent-child interactions through picture books during early childhood

研究代表者

藪中 征代 (YABUNAKA, Masayo)

聖徳大学・教職研究科・教授

研究者番号：50369401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、絵本を介した親子の相互作用の中で発展していく子どもの語りの発達過程について、親子間の発話分析から親子の語りを検討した。2歳児をもつ親子13組を対象に、絵本を介した親子の相互作用場面を分析対象とした。その結果、親の語りに見られた発話内容の評価方略は10種類に分類され、使用頻度は、【擬音語・擬態語】が一番高く、順に【身体的状態語】【心的状態語】【登場人物の発話】であった。さらに、親が使用する文末の終助詞「ね」について検討した結果、自分の発話内容に子どもが同意することを求めるもの【同意】と、互いの気持ちや思いを共有しようとするもの【共有】に分類された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

絵本を介した相互作用から子どもの語りをとらえた研究は日本においては少なく、本研究の学術的意義は大きい。本研究では、絵本の読み聞かせ場面での親子の対話に注目した。その結果、親の語り中出现する終助詞「ね」には、「同意」と「共有」がみられた。親の語りに「共有」が多く出現している親子の方が、親子の相互作用の中で子の語りが多くみられた。

上記のことから、絵本の読み聞かせは子どもの自由な空想を受容・共有し、親子が楽しい時間を共有する場でもあることが実証された。本研究において、絵本の読み聞かせは、絵本を介してお互いの思いを理解し尊重しながら、言葉による伝え合いをする場としても、重要な役割を果たしている。

研究成果の概要(英文)：In this study, concerning a child's process of development of narratives that continue to expand in the context of parent-child interactions through picture books, we will examine the narratives of parents and children by analyzing utterances made between a parent and his/her child. Subjects were 13 pairs of parents with 2-year-old children and data analyzed was from scenes of parent-child interactions through a picture book. As a result, the evaluation strategies of the utterances seen in the parents' narratives were classified into 10 categories. Furthermore, when we examined parents' use of the sentence-ending particle "ne," it was found that use could be divided into asking the children to agree with the content of their utterances "Agreement" or seeking to share each other's feelings and thoughts "Sharing".

研究分野：発達心理学

キーワード：親子の相互作用 絵本の読み聞かせ 発話分析 終助詞

1. 研究開始当初の背景

絵本を媒介とした親子の読み聞かせ活動を扱った研究は、1970年代の後半から多くの研究者によって報告されてきた。その研究の多くは、子どもが他者に絵本を読んでもらうという場面を対象としてきた (Ninio&Bruner, 1978; Ninio, 1983; Moerk, 1985; 石崎, 1996; 横山, 1997)。これに対して、Sulzby (1985) は、子どもと絵本とのかかわりについて、二つの視点から捉えている。第一は、絵本を誰かに読んでもらうというかかわりである。子どもは、絵本に描かれた絵を味わい、絵本の世界を楽しむことができる。第二は、他者に対して読んであげるといふかかわりである。子どもは発達するにしたがって、絵本を通してお話を読んでもらうだけでなく、自分も語り手として、物語を語ったりする場面がみられる。子どもが他者に絵本を読んでも聞かせるという「語り」場面に注目した研究には、藪中・吉田 (2013) がある。5歳児をもつ親子10組を対象として、子どもが親に絵本を読んでも聞かせる場面において行われる親子間の言語的やりとりについて明らかにした。具体的には、子どもが親に絵本をどのように語り、親は、それをどのように援助していくかについて、以下のことが示された。(1)子どものカテゴリ別アイディアユニット数をみると、すべての子どもは「絵本を読むルール」に関して発話している。(2)5歳児は、他者に物語を語るための形式をほとんど身につけていない。(3)親と子どものアイディアユニット数には相関は認められない。(4)親子間の Turn 総数は親子ペアによる差が大きく、Turn 総数と子どもが initiative をとった数との間には正の相関が認められる。(5)子どもが親に絵本を読んでも聞かせる場面では、子ども自身が initiative をとろうとし、親は子どものことばに「引き出し・促し」「発話共有」で応答しようとしている。(6)多くの親は、子どもの語りを共感的に受け止め、子どもの語りの型によって、子どもが語れるように柔軟に対応を変えている。また、藪中・吉田 (2012a・b・c) は絵本を介した親子の相互作用について、親の発話に焦点を当てた研究を行っている。その結果、絵本を介した相互行為の会話のパターンは、母親主導から始まり、2歳頃から母子交代が成立し、母親は子どもが能動的に参加する足場を作り、次第に子ども中心の活動へ導き、親子の共同作業としての語りが2歳頃から認められた。

研究代表者は平成23年度科学研究費基盤研究(C)「乳児期から就学期の絵本を介した親子の相互作用に関する縦断的検討」(研究課題番号:23500890)において、以下の点を明らかにした。絵本を介した相互行為の会話のパターンは、母親主導から始まり、2歳頃から母子交代が成立し、母親は子どもが能動的に参加する足場を作り、次第に子ども中心の活動へ導いている(藪中他, 2012)。読み聞かせの場面は様々な対話が交わされるコミュニケーションの場として機能している(藪中他, 2012)。上記の結果から、「絵本の読み聞かせは、親子が絵本を共有することを通して、子どもと絵本の相互作用を親が媒介するという三項関係(親子・絵本)を作り、この三項関係での情動的なやりとりを通して親子の情動的なコミュニケーションが成立する。そして、これを繰り返すことで対人関係を成立させ、その過程で子どもの自己内対話(子ども自身が自分の心の中で声に出さずあれこれ対話しながら考えを練ったりすること)活動が促され、それによって子どもの言語発達へとつながっていく」というプロセスが考えられる。しかし、絵本を介した相互作用の研究において、子どもの語りの発達過程はいまだ解明されていない。そこで、本研究では絵本を介した親子の相互作用の中で発展していく子どもの語りの発達過程について、2~4歳児の各年齢における親子間の発話分析からそれぞれの語りを検討する。

2. 研究の目的

本研究は、絵本の読み聞かせ場面での親子の相互作用の中で発達していく、子どもの「語り」の形成過程を、2~4歳児を対象として縦断的に検討する。そして、各年齢における親子間の発話を分析することによって、子どもの「語り」の発達と、それを支える親との相互作用の関係を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

東京近郊に在住する満2歳児(平均年齢2歳3か月)13名(女児11名、男児2名)とその親13名(母親12名、父親1名:平均年齢31.9歳)を対象とした。13組の親子は、以下の手続きで選定した。まず、M市内S大学の子育て支援施設に在所した家庭にアンケート調査を依頼した。その際、アンケート調査に回答し、縦断研究プロジェクトへの参加を依頼した。その際、アンケート調査に回答し、縦断研究プロジェクトへの参加依頼を承諾した13家庭を研究協力家庭とした。子はいずれも第一子である。協力者には、協力の時点で本研究の目的と方法を文書および口頭で説明し同意を得ている。毎月1回、対象児の家庭で観察を行う。その際、指定された絵本を用いた読み聞かせの様子をビデオ録画する。家庭で録画する絵本の読み聞かせは、親が子どもに絵本を「読み聞かせる場面」と子どもから親にお話をする「語り場面」を設定する。使用する絵本は、子どもにとって新規なものとし、「文字のない絵本」を中心とする。平成23年度科学研究費基盤研究(C)(研究課題番号:23500890)から、4歳児になると子どもは「絵本を読む=文字を読む」と認識するようになり、文字に対して関心をもつようになることがわかっており、本研究での「お話を語る」という観点からは、文字のない絵本を用いるのが、適当であると考えられる。また、読み聞かせ研究で用いられる絵本は、ほとんどが子どものお気に入りの絵本や読んだことがある絵本がほとんどであり、子どもが読んだことのない絵本を使用している研究は少ない。そこで本研究では、子どもがまだ読んだことがない絵本(新

規絵本)を用いる。絵本は調査者が各年齢で準備する。あらかじめ親に新規絵本をみてもらい、読んだことのあるものがないか確認してもらう。このビデオ録画からは、絵本を介した親子の相互作用において、実際にどのようなやりとりを親子が行い、どのように親子のやりとりが変化しているかを検討することができる。

ここでは第1回目に使用した絵本「ロージーのおさんぽ」(パット・ハッチンス作,わたなべしげお訳,偕成社,1978年)の絵本についての結果を示す。この絵本は、絵と簡単な状況説明の文だけでストーリーやテーマが展開している。夕食前のお散歩を楽しんでいるめんどりのロージーを狙ってうしろからキツネがついてくるが、ロージーが何も気づかないうちにキツネはひどい目にあい、最後は一目散に逃げだすという結末である。文章はとても短く、めんどりのロージーがお散歩をしていることしか書いてないが、絵の展開がすべてを語ってくれる。すなわち、文章の部分を親子がコミュニケーションをとりながら作っていく、あるいは、子どもがお話をつくることにより完成する。したがって、「語り」を取り上げる場合に適した読書材である。

4. 研究成果

(1) 分析の指標

VTR に記録された絵本を介した親子の相互作用場面のうち、親が絵本を手に取り、「おしまい」と言語的あるいは動作で終了(絵本を閉じる等)を示したところまでを分析の対象とした。録画された映像はすべて文字化した文字記録を作成した。本調査では、絵本を読む場面で生じた子どもの発話をアイディアユニット(以下IUと記す。1IU=1 argument+1 relation)を発話単位として分析した。IUは、文章理解・産出の研究において近年一般的に用いられている分析単位で、本研究においても分析方法として採用した。まず、絵本の読み聞かせ場面における親の語りを節に分け、物語を表現する親の発話をその内容から Table 1 に示すような下位カテゴリーに分類した。

コーディング・カテゴリーは、Küntay & Nakamura (2004) が用いたナラティブの評価カテゴリーに一部の内容を追加し、全 10 種類のカテゴリーを用いた。「絵本を読むルール」「心的状態語」「身体的状態語」「不確定な表現」「否定的表現」「登場人物の発話」「因果関係」「強調表現」「擬音語・擬態語」「文末の終助詞「ね」」であった。

絵本を読むルールとして、形式的なオープニング・エンディングに関する発話はほとんどの親子で発話されていた。また、心的状態語ではないが感情に関連する身体的状態として、「笑う」、「痛い」、「泣く」、「眠い」などの表現があり、養育者の心的状態度を検討した Taumoepeau & Ruffman (2006; 2008) において、コード化されていることを考慮してのことである。

親の語りのコーディングは2名のコーダーが独立して行い、信頼係数 0.84 であった。不一致箇所については協議の上最終コーディングを決定した。

Table 1. Categories Related to the Content of Parents' Utterances

| Category Name | Definitions | Examples |
|------------------------------------|--|---|
| Rules for reading picture books | Utterances related to a formal opening and ending. Utterances that consist of an opening indicated by saying "The Beginning" followed by saying the "Title," and utterances that indicate the end of the story such as "The End." Name of the author and writer of the original draft. | "Rosie's Walk" "Beginning" "The End" |
| Status words for mental state | Words expressing the mental state of the characters (including cognition and emotions) | Happy, scared, joyful, surprised, anxious, etc. |
| Status words for physical state | Words representing the physical condition | Laugh, feel pain, cry, sleepy, hungry |
| Uncertain expressions | Expressions used when the authenticity of a proposition is uncertain | Maybe, ~perhaps, possibly, it seems~ |
| Negative expressions | Negative expressions | cannot~, not~ |
| Utterances of characters | Calculated utterances where the narrator becomes the character | |
| Causal relationship | Explanations regarding the causal relationship of events | did~therefore, therefore~, so~ |
| Emphatic expressions | Adverbial phrases used to emphasize the behavior of characters | Once again, extremely, very |
| onomatopoeia and mimetic words | Exclamations that express the state of things, cries, emotions, responses, calls | Hop, he lter-skelter or hurry, excited, thrilling, oh! oh no! shhh! |
| "Ne," the sentence-ending particle | The sentence-ending particle "ne" used at the end of a sentence | Something's there, ne? It's nice, ne? Right, ne? |

(2) 親の語りの長さと言話内容

親の発話のカテゴリーごとの出現数を Table 2 に示した。下位カテゴリーごとの使用頻度の割合は、「登場人物の発話」「強調表現」「心的状態語」「擬音語・擬態語」が高かった。また、親によって使用カテゴリーに差が認められた。この際については、今後の養育歴に加え、認知スタイル、心理的な個人特性などの視点から検討を加えていく必要があると考える。

(3) 親の語りにおける終助詞

親が使用する文末の終助詞「ね」について、カテゴリーに分け、その出現数を Table 3 に示した。親の語りにおいて「ね」を使用していたのは、13名全員であった。親が発した「ね」には、

自分の発話内容に子どもが同意することを求めるもの(同意)と、互いの気持ちや思いを共有しようとするもの(共有)があった。

親Aには、「めんどりさんが歩いていたら何かあるね」「ゴーンとしたね」「かえるさんがいるね」「カッカッカーだね」「みんないるね」という発話がみられた。描かれた絵についてまず親が説明し、その内容に関する同意を子どもに求めていた。「ゴーンとしたね」という発話の前には「これ、どうなる?」という子どもへの問いかけがみられたが、それへの子どもの反応を待たずに「ゴーンとしたね」と発していた。

親Bにも、「かえるさんもびっくり。びっくりしているね」「イテテテってなってるね」「一本だけ出てるね」という、親の説明への同意を求める「ね」がみられた。また、子どもの「いっば、いっば」という発話を受けて「いるね」と応答する場合のような、子どもの気持ちを共有する「ね」もみられた。

親Cと親Dには「おうちへ帰ってきた。『ただいま』って、よかったね」という、親による説明への同意を求める「ね」がそれぞれみられた。

親Eには、「お池のまわりをぐるり。だれ?だれだ?」(親) 「かえるさん」(子) 「かえるさん」(親) 「パッカ、パッカ」(子) 「うん、そうだね」(親)というように、子どものことばを誘導し、発せられた子どものことばを受けて互いに気持ちを共有しようとする「ね」がみられた。

親Hには、「これ」(子) 「これね」(親) 「おにわをすたこら」(親) 「ふふん」(子) 「すごいね、ロージー、はやいね」(親)のように、子どもが何らかのことばを発するのを待ち、発せられた子どものことばを受けて気持ちを共有する「ね」がみられた。

親Iには、「あっ、いた。うさちゃん」(子) 「うさちゃんだね」(親)というように、子どもが発したことばを受けて互いに気持ちを共有しようとする「ね」がみられた。また、絵の内容に関して、「池の中にポチャンと入っちゃったね」と親が説明し、子どもに同意を求めていた。

親Jには、「キツネさん見ているね」「キツネさん来たね」「小麦粉が落ちちゃったね」と描かれた絵についてまず親が説明し、その内容に関する同意を子どもに求めていた。また、「あわわだよ」(子) 「あわわみたいだね」(親) 「はちがいっばい」(子) 「いっばいいるね」(親)と子どもの気持ちを共有する「ね」もみられた。

親K、親Lには、「ロージーはどんどんおさんぼしていくね」「ここ痛いね」「ロージーは歩いているね」「キツネさんもいたね」と親が絵の内容を説明し、子どもに同意を求めていた。

親Mは、「キツネさんは干し草の山にはまっちゃったね」「もう夜だね」と親が説明し、子どもに同意を求めていた。また、「真っ白けっけ」(子) 「真っ白けっけだね」(親) 「あっ、いっちゃった」(子) 「いっちゃったね」(親)と子どもの気持ちを共有する「ね」もみられた。

本研究の結果から、親子の絵本を介した相互作用において、親が発する文末の「ね」には大きくは、2つのタイプがあることがわかった。1つは「同意」の「ね」:親がまず場面を説明し、その説明への子どもの同意を求める文末の「ね」である。2つ目は「共有」の「ね」で2つに分けられる。問いかけるなどして子どもからの発話を誘導し、そのことばを受けて子どもの気持ちや思いを共有しようとする、文末の「ね」、子どもの自発的なことばを待ち、子どもから発せられたことばを受けて子どもの気持ちや思いを共有しようとする、文末の「ね」である。

(4)親の発話数と子の発話数

親の発話の中で出現していた終助詞「ね」の数は平均して 5.34 (SD4.75)であった。また、子どもの発話数は、平均して 12.9 (SD8.43)であった。次に親の使用する終助詞「ね」が子の発話数に及ぼす影響を検討するために、親の語りの中で共有の「ね」が2回以上みられた13組の親子を「共有あり」群、それ以外の親子つまり親の語りの中で共有の「ね」がほとんど使用されていなかった16組を「共有なし」群とし、それぞれの群ごとの「子の発話数」を示した。t検定の結果、「共有あり」群の方が「共有なし」群よりも子の発話数が多かった ($t(27)=2.91$, $p<.01$)。

(5)考察

本研究の結果から、親子の絵本を介した相互作用において、親の語りの中に出現する終助詞「ね」には2つのタイプがあることがわかった。1つは同意の「ね」:親がまず場面を説明し、その説明への子の同意を求める「ね」である。2つ目は、共有の「ね」である。子どもの自発的なことばを待ち、そのことばを受けて子の気持ちや思いを共有しようとする「ね」である。そして、親の語りの中に共有の「ね」が多く出現していた親子の相互作用において、子の語りが多くみられた。

では、なぜ、共有の「ね」は子の発話に肯定的影響をもたらしたのであろうか。

秋田・無藤(1996)は幼稚園児の母親332名を対象に、読み聞かせが子どもの発達にもつ意義について質問紙調査を実施し、「文字を覚え、文章を読む力や生活に必要な知識を身につける」だけでなく、「空想したり、親子のふれあいをしたりする」という回答が多かったことを報告している。このように、絵本の読み聞かせは、親がイメージした物語世界を子どもに伝え、その中で文字や文章に子どもが親しむ、という場であるが、一方で、子の自由な空想を受容し、共有し、親子が楽しい時間を共に過ごす、という場でもある。本研究における「共有あり群」では、親が子どもに一方的にストーリーを伝達するのではなく、子どもの語りを取り入れながら一緒にストーリーを作っていく、といった親子の共有場面が形成されていた。ここで一例をあげよう。

【事例】

ロージーを追いかけていたきつねの頭上から小麦粉の入った袋が落ち、「白いもの」に埋もれたきつねが身動きできなくなった場面で、子が「あわわ」と発言し、親が「あわわじゃないよ。小麦粉だよ」と返答したが、子は「あわわだよ」と言い張ると、親は「あわわみたいだね」と終助詞「ね」を使用して返答し、自分の解釈を取り下げて子の解釈を尊重していた。

この事例において、親は子どもの語りを共感的に受け止め、子どもが豊かに語れるように柔軟に対応している。このような親の援助は子どもの想像力を豊かにするだけでなく、考えたことをことばで表現する意欲を高めると考えられよう。

幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿を挙げており、その中の1つに「言葉による伝え合い」がある。具体的には以下のとおりである。「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」

絵本の読み聞かせはその内容を理解し、さまざまな知識を身に付けるためだけでなく、絵本を介して、お互いの思いを理解し尊重しながら、言葉による伝え合いをする場としても、幼児期の育ちにおいて重要な役割を果たしている。

本研究から、次の2点が課題として挙げられた。第一に、子どもの発達に伴って、このような親の発話の文末の「ね」は変化するのであるだろうか。第二に、親の発話の文末の「ね」のタイプによって子どもの語りに違いが生じるのであるだろうか。この点について検討することが今後の課題である。

Table 2. Number of occurrences of a parent's utterances by category

| Parent Evaluation strategy | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | Total number |
|--|------|------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|-------|--------------|
| Rules for reading picture books | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 | 16 |
| Status words for mental state | 2 | 3 | 1 | 1 | 0 | 3 | 4 | 0 | 17 | 5 | 9 | 2 | 1 | 48 |
| Status words for physical state | 2 | 4 | 2 | 4 | 9 | 8 | 3 | 8 | 3 | 7 | 2 | 8 | 3 | 63 |
| Uncertain expressions | 1 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 4 | 0 | 2 | 0 | 16 |
| Negative expressions | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 11 |
| Utterances by characters | 2 | 2 | 2 | 0 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | 5 | 0 | 6 | 31 |
| Causal relationship | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 1 | 1 | 6 | 16 |
| Emphatic expression | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 3 | 2 | 0 | 4 | 0 | 14 |
| Onomatopoeic and mimetic words | 5 | 9 | 2 | 3 | 1 | 13 | 9 | 8 | 19 | 8 | 5 | 12 | 16 | 110 |
| Total No. of evaluation strategies used | 14 | 26 | 11 | 12 | 12 | 33 | 20 | 21 | 57 | 29 | 23 | 32 | 35 | 325 |
| Frequency of use of evaluation strategies | 4.31 | 8.00 | 3.39 | 3.69 | 3.69 | 10.15 | 6.15 | 6.46 | 17.54 | 8.92 | 7.08 | 9.85 | 10.77 | |
| Length of narrative (total number of sections) | 137 | 237 | 78 | 107 | 22 | 260 | 130 | 99 | 460 | 258 | 142 | 454 | 538 | |

Table 3. No. of utterances of sentence-ending particle "ne" by category

| | Agreement | Sharing | Total |
|---|-----------|---------|-------|
| A | 5 | 0 | 5 |
| B | 3 | 1 | 4 |
| C | 1 | 0 | 1 |
| D | 3 | 1 | 4 |
| E | 1 | 0 | 1 |
| F | 4 | 1 | 5 |
| G | 3 | 5 | 8 |
| H | 0 | 3 | 3 |
| I | 5 | 3 | 8 |
| J | 6 | 15 | 21 |
| K | 3 | 0 | 3 |
| L | 13 | 0 | 13 |
| M | 12 | 5 | 17 |

< 引用文献 >

秋田 喜代美・無藤 隆. (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. Japanese Journal of Educational Psychology, 1996, 44, 109-120.

石崎 理恵. (1996). 絵本場面における母親と子どもの対話分析, フォーマットの獲得と個人差. 発達心理学研究, 7(1), 1-11.

Küntay A. C. & Nakamura K. (2004). Linguistic strategies serving evaluative functions:

- A comparison between Japanese and Turkish Narratives. In S. Strömqvist & L. Verhoeven (Eds.) *Relating events in narrative (Vol. 2: Typological and contextual perspectives* pp. 329-358). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates
- Moerk, K.L. (1985). Picture-book reading by mothers and young children and impact upon language development. *Journal of Pragmatics*, 9, 547-566.
- Ninio & Bruner, J.S. (1978). The achievement and antecedents of labeling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.
- Ninio, A. (1983). Joint Book Reading as a Multiple Vocabulary Acquisition Device. *Developmental Psychology*, 19, 445-451.
- Sulzby, E. (1985). Children's emergent reading of favorite storybooks: A developmental study. *Reading Research Quarterly*, 22, 458-481.
- 藪中 征代・吉田 佐治子.(2013). 絵本をめぐる親子の言語的相互作用 - 絵本読み場面における子どもの語りを通して - . 聖徳大学研究紀要, 24, 1-9.
- 藪中 征代・吉田 佐治子.(2012a). 絵本をめぐる親子のやりとり 『あいうえおの本』の絵本の読み聞かせを通して . 日本教育心理学会大 54 回総会発表論文集, 375 .
- 藪中 征代・吉田 佐治子.(2012b). 1 冊の絵本をめぐる親子のやりとり 文字のない絵本『ぞうのボタン』の読み聞かせを通して . 日本保育学会第 65 回大会発表要旨集, 958 .
- 藪中 征代・吉田 佐治子.(2012c). 絵本をめぐる親子のやりとり(6) 『かいじゅうたちのいるところ』の絵本の読み聞かせを通して . 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 399 .
- 横山 真貴子.(1997). 就寝前の絵本の読み聞かせ場面における母子の対話内容 . 読書科学, 41, 3, 91-104 .

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計5件)

Masayo Yabunaka & Yumi Tamase The influence of parents' replies on children's speech in parent-child interactions while reading picture books: Focusing on the sentence-ending particle "Ne", European Early Childhood Education Research Association, 2018.8.26 (Budapest, Hungary)

Aki Ito, Yumi Tamase & Masayo Yabunaka Co-construction of the Chorus during picture book group reading sessions European Early Childhood Education Research Association, 2018.8.26 (Budapest, Hungary)

Masayo Yabunaka & Yumi Tamase A developmental study of a child's narrative as seen from parent-child interactions through picture books during early childhood, focusing on the parent's narratives during picture book reading situations. Early Childhood Education with the Asia-Pacific, 2018.7.5 (Sarawak, Malaysia)

藪中 征代・玉瀬 友美 幼児期の絵本を介した親子の相互作用から捉える子どもの語りの発達の検討 2 歳児を中心として、日本保育学会、2018.5.12-13、宮城女学院女子大学(宮城県)

Masayo Yabunaka & Yumi Tamase A developmental study of a child's narrative as seen from parent-child interactions through picture books during early childhood. Early Childhood Education with the Asia-Pacific, 2017.7.6 (Cebu, Philippines)

[図書](計2件)

藪中 征代 他 萌文書林、保育者のための言語表現の技術、2018、199(36-50)

藪中 征代・玉瀬 友美 他、教育出版、新版保育内容・言葉、2017、216(1-42)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：玉瀬 友美

ローマ字氏名：TAMASE, yumi

所属研究機関名：高知大学

部局名：教育研究部人文社会科学系教育学部門

職名：教授

研究者番号(8桁)：90353094

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。